

タマネギの育苗法の改善による増収技術			
<p>[ 要約 ] タマネギのセル成型苗をベンチ育苗すると、は種後45日で根鉢が形成され、11月初旬定植が可能となる。当育苗法で早期定植すると生育が促進され、環境こだわり農産物認証基準内の施肥で栽培しても、セル成型苗直置き60日育苗の慣行施肥栽培以上の収量が確保できる。</p>			
農業技術振興センター・栽培研究部・野菜担当		[ 実施期間 ] 平成16～17年度	
[ 部会 ] 農 産	[ 分野 ] 環境保全型技術	[ 予算区分 ] 県単	[ 成果分類 ] 指導

[ 背景・ねらい ]

本県のタマネギは水田の裏作として定着しており、近年では滋賀県環境こだわり農産物の認証を受ける産地も生まれている。しかし、生育の大半が低温期に当たるタマネギは、有機質肥料の肥効が悪く、生育や収量が慣行施肥より劣る。また、本県の主流である貯蔵用タマネギの定植時期は11月下旬であるが、県北部では「しぐれ」が始まる時期であり、それが定植時期を遅らせ、収量低下をさらに助長している。そこで、環境こだわり農産物認証基準内の施肥で、安定生産できる栽培方法の開発を行う。

[ 成果の内容・特徴 ]

タマネギのセル成型苗をハウス内でベンチ育苗すると、は種後45日で機械定植が可能な根鉢が形成でき、セル内の根量は慣行苗（成型苗のハウス直置き60日育苗）より多くなる（表1、写真1）。

9月下旬には種し、45日間ベンチ育苗した苗を11月初旬に定植すると、環境こだわり農産物認証基準内の施肥による栽培でも、同日は種の慣行栽培（成型苗ハウス内直置き60日育苗、11月下旬定植、慣行施肥）以上の生育、球重、収量が得られる（図2～5、表1）。また、何れの栽培も抽台は発生しなかった。

[ 成果の活用面・留意点 ]

ベンチ育苗は肥料切れしやすいので、慣行の直置き育苗より追肥時期を早め、葉色を見て適宜追肥を行う必要がある。

ベンチ育苗は乾燥しやすいため、セル上部まで根鉢を形成するためには、直置き育苗よりこまめな灌水が必要である。

ベンチ育苗は灌水ムラにより生育が不均一になりやすいため、トレー周辺部の補正灌水に努める。

有機質肥料を利用し早期定植をすると、タマネギバエやタネバエの被害を受ける危険が増すため注意が必要である。

ベンチ育苗は直置き育苗に比べて、定植適期が短いので植え遅れに注意する。

[ 具体的データ ]

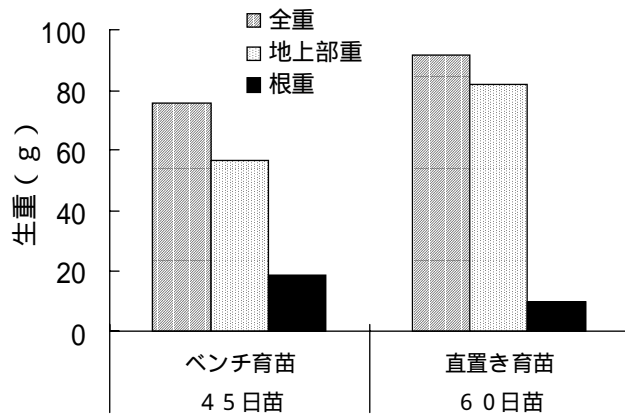


図1. 育苗方法の違いが定植時の苗質に及ぼす影響



ベンチ育苗45日苗 直置き育苗60日苗  
写真1. 根部の状態

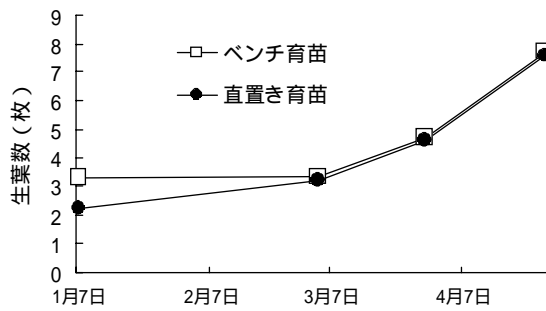


図2. 育苗方法の違いが生葉数に及ぼす影響

注) ベンチ育苗は、9月22日は種、11月6日定植で、環境こだわり農産物認証基準施肥  
直置き育苗は、9月22日は種、11月21日定植で、慣行施肥

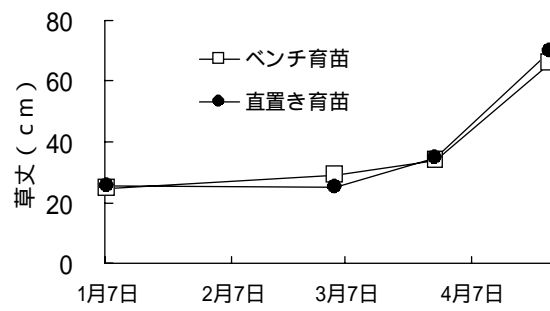


図3. 育苗方法の違いが草丈に及ぼす影響

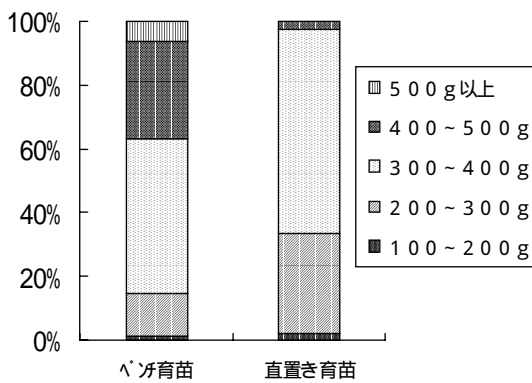


図5. サイズ別収量比率

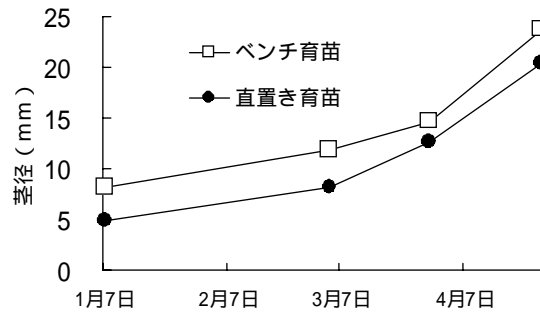


図4. 育苗方法の違いが莖径に及ぼす影響

表1. 育苗方法の違いが平均球重と収量に及ぼす影響

	平均球重(g/球)	収量(kg/a)
ベンチ育苗	372	872
直置き育苗	319	746

[ その他 ]

- ・研究課題名  
大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発  
中課題名：環境こだわり農業推進のための技術開発  
小課題名：園芸作物の環境こだわり農産物安定生産技術の開発
- ・研究担当者：田中寿
- ・その他特記事項：平成16年度要請課題（東近江地域農業改良普及センター）